

死者を語る言葉

— トーマス・ベルンハルト『カルタ遊び ある遺稿』における 言語懷疑について —

飯 島 雄太郎

はじめに

本稿で扱う戦後オーストリアの作家、トーマス・ベルンハルト（1931-1989）は、延々と続くモノログによって作品が展開する独特のスタイルを構築した事で知られる。特筆すべきは、その殆どの作品において死者をめぐる回想が主要なテーマとなっていることである。Jannerは、こうした特性をもって、その作品を墓碑銘に喩えている。¹

本稿で扱う『カルタ遊び ある遺稿 *Watten. Ein Nachlaß*』においても死者の回想が主題となっている。本作は1969年に発表された中編小説である。² ベルンハルトは、1960年代後半から実験的な作風の中編小説を4作執筆しているが、その中の一編に当たる。本作もまた言語実験的な色合いが強く、言語に対する問題意識がダイレクトに表出された作品としても知られている。

本作の主人公である医者とは、失職したのち、バラック小屋に暮らしながら、幼馴染みと森の中に建てられたゲストハウスでカルタ遊びを行う日々を送っていた。しかし、あるフェーン現象のひどい日、彼らは皆それぞれに森の中で迷い、結果的にカルタ仲間の一人、製紙工ジラーが自殺する。それをきっかけとして医者はカルタをやめることになる。

本作は医者の手による書簡という形をとっている。語られる内容は大きく分けて二つある。運送業者との会話の再現と、手紙の宛先に対して向けられた自らの境遇に対する愚痴である。切れ目なく続く医者への語りは、あたかもいつまでも終わりになく続くかのような外観を呈している。³

ベルンハルトのテキストは以下のものを使用し、引用は括弧内に巻号と頁数を記す。Bernhard, Thomas: *Werke*. Hrsg. von Wendelin Schmidt-Dengler und Martin Huber. 22 Bde. Frankfurt a. M. 2003ff. [= W].

¹ Janner, Markus: *Der Tod im Text Thomas Bernhards Grabschriften. Dargestellt anhand von frühen Erzählversuchen aus dem Nachlass, der Lyrik und der späten Prosa*. Bern 2003, S. 17.

² 原題の *Watten* とは、オーストリアで好まれているカードゲームである。Vgl. Sorg, Bernhard: *Thomas Bernhard*. München 1977, S. 129.

³ Bohrer は次のように述べている。「物語は生起することをやめない。終止符は存在しないのである。」Bohrer, Karl-Heinz: *Es gibt keinen Schlußstrich*. In: Botond, Anneliese (Hrsg.): *Über Thomas Bernhard*. Frankfurt a. M. 1970, S.111-115, hier S. 115.

本稿の目的は、本作を言語懐疑論の観点から解釈することである。言語懐疑とは、言語の表現能力、そして伝達能力に対する疑いを意味する。Eyckeler によれば、言語への疑いと一口に言っても、「言語批判」(Sprachkritik) と「言語懐疑」(Sprachskepsis) の二つの傾向が歴史的には存在する。⁴ 前者が、言語が実際に運用されている局面に着目し、言語の運用に対する批判から、より適切な言語のあり方を模索するのに対して、後者は、言語に対する根底的な懐疑を意味する。19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての世紀転換期において、こうした言語懐疑の思想が隆盛を迎える。とりわけニーチェ、マオトナー、ホーフマンスタールはその先駆的存在とされる。ベルンハルトがこうした世紀転換期以来の思潮に属することはこれまでも指摘されてきた。⁵ 自伝には次のようにある。

真実を伝えること、示すことは不可能であるがゆえに、私たちは真実を書こうと、記述しようとするので妥協してきた。それはちょうど、真実が口にし得ないということを意識しながら、真実を口に出すようなものだ。(W10, S. 136)

ベルンハルトにしたがえば、言葉によって何事かを表現することは、その不可能性を意識しながらの絶望的な試みに他ならない。Eyckeler は、こうした言語に対する批判の徹底性において、ベルンハルトはドイツ文学史においても突出した存在であると指摘している。⁶

本作を言語懐疑論の観点から考察したのは Helms-Derfert と Thiher である。⁷ Helms-Derfert は、本作の医者への語りと言語外の現実を表象する力を持たないと論じ、それを哲学的、科学的風刺として解釈する。⁸ Thiher は、現代文学がメタフィクショナルな傾向を強めていることを論じた一文において、本作を自己言及の不可能性を示した作品として論じている。Thiher の解釈もまた、本作において言語の限界が示されていると考える点において、本作を言語懐疑論の観点から解釈する傾向に属すると言ってよい。

しかし、Helms-Derfert、Thiher の両者は、本作の詳細なディテールに踏み込んだ分析を行っていない。とりわけ本作における死のモチーフと言語懐疑の関係についての考察は、両者の論から欠落している。本稿の目的は、本作が何を言語化出来ないものとしているのかについての分

⁴ Eyckeler, Franz: *Reflexionspoesie. Sprachskepsis, Rhetorik und Poetik in der Prosa Thomas Bernhards*. Berlin 1995, S. 22. Eyckeler の研究書は、ベルンハルトの言語観を思想史的な文脈に位置づけたものである。その中で Eyckeler がベルンハルトの言語観の先駆的存在として検討の対象としているのは、モンテーニュ、ニーチェ、ヴィトゲンシュタインの三名である。Ebd., S. 16ff.

⁵ Ebd., S. 63f.

⁶ Ebd., S. 55.

⁷ Helms-Derfert, Hermann: *Die Last der Geschichte: Interpretationen zur Prosa von Thomas Bernhard*. Köln 1997, S. 85-106; Thiher, Allen: A Theory of Literature or Recent Literature as Theory. In: *Contemporary Literature* 29, Nr. 3 (1988), S. 337-350.

⁸ Helms-Derfert, S. 95f.

析を施し、言語への疑いが作中において有する意味を考察することである。

まず第1章において語りの主観性に本作の特徴があることを示し、本作において言語の機能不全が問題となっていること、その背景にはパースペクティヴィズム的な真理観があることを確認する。次いで第2章では本作の饒舌な語りにおいて、何が言語化出来ないものとされているかを指摘する。第1節でジラーという死者、次いで第2節において自己自身そのものが、本作において言語によって把握しがたいものとして書かれていることを論じる。最終的に「まとめ」において、本作における言語懷疑の役割を考察する。

1. 「声」のパースペクティヴィズム

本章では、本作の語りの特質に潜む言語への疑いを摘出する。医者の語りに通底するのは、過剰な具体性への指向が、かえって言葉の伝達を損なうという事態である。医者は言葉によって出来る限り物事を具体的に、かつ正確に再現しようとする。こうした客観性への指向を孕んだ言語運用は、その過剰さゆえに失敗に陥り、かえって医者の方の言葉の主観的な性質を暴き出してしまふ。本章ではこうした傾向を、いくつかの例に即して論証する。

第一に挙げられるのが、医者による会話の再現である。医者は、運送業者との会話を正確に再現するのだが、その際、医者は接続法や、「～と言った」といった伝聞の語りをを用いることによって、誰の発言かを克明に示そうとするのである。結果的に本作の記述は、極めて見通しのつけにくいものとなっている。次の引用部においては、ジラーの遺体の発見譚を語っているのは誰か、ということが直感的には見分け難い。

丈の長い茶色い質素なズボンと、灰色の上着だけを着ていた、と亭主と行商人の二人は言った、と運送業者は言った、行商人はまた次のように言った、ジラーのズボンからリッツ新聞の日曜版が突き出ているのを見た、と。しかしジラーを木から下ろした時には奇妙なことに、と行商人は言った、と運送業者は言った、もうジラーのズボンのポケットにはリッツ新聞は見当たらなかったと。(W12, S. 103f.)

また、次の引用部ではバックルを可能な限り具体的に表現することにこだわるあまり、医者の言葉は伝達を果たし得ない。そのありさまは喜劇的ですらある。

もちろん俺はしばしば自分に問いかける、これらのバックルじゃ大きすぎやしないか、もっと小さなバックルで充分じゃないか、古いバックルよりは大きく、けれど新しいバックルほど大きくない、半分くらいの大きさのバックルでも、と俺は言う。(W12, S. 95)

妹が眼鏡を作ったエピソードを語る次の引用においては、こうした過剰な具体性が言葉に情動的な性質を付与している。医者は代名詞を用いずに、「眼鏡」という単語を繰り返し、エピソードを可能な限り具体的に語ろうとするのであるが、結果的に言葉を伝えようとする医者の過剰な意図ばかりが強調されることになる。反復を伴う医者の言葉は情動的、かつ音楽的である。⁹ 原文の特異さを理解してもらうためにあえて原文を併記する。

Endlich die **Brille**! Wiederholt sie, es mache ihr nichts aus, daß sie acht Wochen lang auf die **Brille** warten und fast zehnmal wegen dieser **Brille** in die Stadt habe fahren müssen, daß sie der Optiker so lange zum Narren gehalten hatte, die Optiker halten einen immer zum Narren, sie habe ihre **Brille**, und die **Brille** sei gut, gut und schön, und sie will mir die **Brille** zeigen und nimmt die **Brille** herunter, und ich sage, sie solle die **Brille** wieder aufsetzen, und sie setzt die **Brille** wieder auf, und die **Brille** zerfällt. In sieben oder acht Stücke zerfällt die **Brille**. (太字強調：引用者)

やっと眼鏡が！ と彼女は繰り返す。八週間にわたって、ひたすら眼鏡を待ちわびたことなど、そして殆ど十回もこの眼鏡のために都市に行かなければならなかったことなど何でもない、眼鏡屋が私のことをそれはそれは長いこと道化扱いしたことも何でもないと彼女は言った。眼鏡屋の連中ときたら、いつだって人を道化扱いするのだから。ついに自分の眼鏡を手に入れた、いい眼鏡、いい眼鏡、最高、彼女は俺に眼鏡を見せようとし眼鏡をとる、もう一度かけて、と俺は言う。ふたたび彼女は眼鏡をかける。眼鏡碎ける。七つか八つの破片に眼鏡砕け散る。(W12, S. 95)

以上の例からも見て取れるように、医者は言葉によって現実を正確に、具体的に表象しようとするが、結果的に医者の言葉は恣意的な表現に陥り、空転してしまう。医者の正確性に対する要求があまりにも高すぎるのである。本作の語りは、言語の表現能力に対する過度の要求を抱く人物を設定することによって、言語の限界を戯画的に示しているのである。Helms-Derfert は

⁹ Ervedosa はこうした反復のうちに、言葉の身体性への傾斜を認めている。Ervedosa, Clara: „Vor den Kopf stoßen“ *Das Komische als Schock im Werk Thomas Bernhards*. Bielefeld 2008, S. 306-321. また、Marquardt はベルンハルト作品の反復のうちに、情動性に加えて、生の単調さの表現を見ている。Marquardt, Eva: Wortwörtlich. Formen der Wiederholung im Werk Thomas Bernhards. In: Hilmes, Carola / Mathy, Dietrich (Hrsg.): *Dasselbe noch einmal. Die Ästhetik der Wiederdholung*. Wiesbaden 1998, S. 229-243, hier S. 234-236. 筆者の問題提起とは異なるため、本稿では論じなかったが、こうした生に対する倦怠というモチーフは、本作の重要な主題でもある。中でも、König の論文は本作を「倦怠」との関連から解釈する上でメルクマールとなった。König はベルンハルトがパスカルの思想に影響を受けていたことを踏まえた上で、本作をパスカルの「倦怠」の思想の図解として解釈したのである。König, Josef: „Nichts als ein Totenmaskenball“. *Studien zum Verständnis der ästhetischen Intentionen im Werk Thomas Bernhards*. Frankfurt a. M. 1983, S. 68-76. Helms-Derfert はじめ、複数の研究者が、König の見解に倣っている。Vgl. Betz, Uwe: *Polyphone Räume und karnevalisiertes Erbe. Analysen des Werks Thomas Bernhards auf der Basis Bachtinscher Theoreme*. Würzburg 1997, S. 161-166, hier S. 164f.; Helms-Derfert, S. 96-99.

これらの点をもって、医者の語りのうちに哲学的、科学的な正確性に対する風刺を読み取っている。¹⁰

もっとも医者の特徴は、何も過剰な正確性への固執にのみ尽きるのではない。むしろ、その主観的な性質にこそあるというべきである。次の引用においては、医者は「温泉詐欺（Bäderscharlatanismus）」なる造語を作って、温泉に対する根拠不明の中傷を行うが、この表現において医者は正確な描写に固執している訳ではない。そうではなく、造語によって自らの怒りを表すことに腐心している。こうした言葉の感情的な性質が、医者が客観性を装いつつも、主観的な真実を語っているに過ぎないことを如実に示している。

その類の温泉ときたら、ちょっと滞在しただけで、卒中に襲われるんだ、温泉の墓地が最大級のものであることは有名だ。健康状態を改善するために、遠方からやって来た人たちがどっさりそこには眠っている。どんなに小さい温泉の墓地にだって、全ヨーロッパの人々の名前があるものだ、と俺は言った、尊敬する方よ、実のところ、俺はこの年にして、温泉詐欺に引っかかったんだ。運送業者に俺は言う。温泉なんていかさまだ。（W12, S. 83f.）

したがって、本作の語りの特徴は、言葉によって語られる事実が主観的なものにすぎないことを示す点にあると言えるだろう。医者の研究のモチーフも同様の主題系に属している。医者は「あらゆる病からひとつの哲学を生み出す」（W12, S. 81. 強調は原文ママ）研究に従事しているが、纏めることが出来ない。作中では膨大なメモの山に埋もれて、自身の研究の失敗を語る医者の言葉が繰り返される。¹¹ 研究の失敗というモチーフのうちに、言葉によって客観的な認識に至ることの不可能性が象徴されているのである。その意味で、本作はパースペクティヴィズムに依拠した真理観を示しているということが出来る。パースペクティヴィズムとは、あらゆる真理は主観的なものにすぎないという立場から、客観的かつ普遍的な真理を仮象として批判することを意味する。¹² この点を明瞭に示しているのが、会話の再現という本作の形式である。

本節の冒頭に示した引用において、ジラーのズボンに新聞が入っていたという事実は、客観的な事実ではなく、あくまでも行商人、運送業者、そして医者の主観的なフィルターを通過したものとして示され、その客観的な真偽が留保されるのである。第2章第1節において詳述す

¹⁰ 後述するように、医者は科学者として設定されている。Helms-Derfet によれば、眼鏡が砕けるというエピソードもまた認識の不可能性を象徴的に示している。Helms-Derfert, S. 95f.

¹¹ 「当時俺が抱いた考えは、いつだって無用の長物以外の何物でもなかった。狂気だった。いかさまだった。というのも、文字が示すのは理性などではない、茶番、無能、下劣なのだから。」（W12, S. 120）

¹² 主としてニーチェに由来する考え方である。ニーチェのパースペクティヴィズムとベルンハルトの言語懐疑の関係については既に Eyckeler の指摘がある。Eyckeler, S. 135-167.

るが、人々がジラーの死について語る言葉は噂話の域を出ず、決して事の真相を語るものではない。医者バラック小屋に暮らしながら、ジラーとの会話を通して現実を把握しようとする。しかし、言葉は認識の道具たり得ないのである。

言葉による認識が主観的なものでしかあり得ないこと、それこそが、本作の語りの根底に潜む言語懐疑である。研究者として設定されている医者という人物は、こうした思想を図解するための戯画化された人形のような存在であるとも言えるだろう。第2章以下で詳述する本作の言語懐疑の根底には、パースペクティヴィズムに由来する認識批判があるのである。

2. 本作における語り得ぬものについて

前章では、医者語りの主観的な性質を論じた。本章では、より具体的なプロットに即して考察することを通じて、「死者」や「自己」といった主題が、言語によっては把握しがたいものとされていることを示す。まず、第1節において、ジラーというものの言わぬ死者の存在が、次いで第2節において自己自身が言語化出来ないものとして本作では書かれていることを論じる。

2. 1. ジラーの死

本節では、作品の中盤に挟まれた「行商人」と題された章を題材に、本作における自殺者ジラーの表象を検討する。この章では、行商人がジラーの自殺死体を発見した顛末が、ゲストハウスで運送業者たちに語る会話の引用という形式で語られるのだが、この章にはいくつかの謎がちりばめられている。

そもそも、ジラーの自殺には不可解な点がいくつかある。第一に、失踪した朝、誰一人ジラーに自殺の予兆を見なかったことである。それどころか、当日の朝ジラーは妻に将来の旅行の計画の約束すらしていた。そしていつものように仕事を終え、カルタに行くために同僚と別れているのである。次いで不可解な点として、ジラーが、通常自殺が行われるトラウン川ではなく、森の中で縊死体となって発見されたことが挙げられる。そのため、遺体の発見は失踪から二ヶ月あまり経ってから、行商人によってなされることになる。医者は、行商人を不気味と呼び、犯罪との関わりを匂わせもする。

行商人のような連中は、自殺者、失くした宝石、大金を見つけると相場は決まっている。そもそも奴らはいつだって犯罪に巻き込まれる。だから行商人は不気味なんだ。(W12, S. 109)

興味深いことに、行商人の発言にもまたいくつかの矛盾がある。まず、遺体を発見して宿に戻るとき行商人が見たと述べる宿の光である。しかし、当夜宿で灯りをつけたものはいなかっ

たと運送業者は証言する。そして、彼の目撃したジラーのズボンに挟まっていたとされる新聞が見つからなかったことである。

これらの謎に対して、テキストは答えを与えていない。ある意味では、医者が行商人に対して覚える胡散臭さを読者も追体験出来るかのように本作は書かれているのである。何故、行商人は宿に帰れたのか？ もしかしたら彼はジラーの死に関わっており、どこに遺体があるのか知っていたのではないのか、という疑いさえも喚起する。

しかし、真相は闇の中である。もし本作が行商人の手による手記として書かれていたならば、全く別の事実が語られることになるかもしれない。だが、それを知ることは読者にはもちろん、おそらく作中人物たちにおいても絶たれている。

医者は、人々の会話を複製するが、そこに記されている言葉はあくまでも表層的な噂話にすぎない。そのため、ジラーは何故自殺したのか、行商人は何故死体を見つけたのか、という肝心の点については、誰もが憶測によってしか接近出来ないのである。

医者は、人々がジラーの自殺の原因を「意識障害」という言葉で理解しようとするのを、次のように批判する。ここにおいて、前章で確認したような医者 of 正確性への指向を見ることが出来るだろう。おざなりな言葉によってお茶を濁すことを拒否する医者の姿勢は、倫理的ですらある。人々は「意識障害」という抽象概念によって、ジラーの死の不可解さから目を背けるのであるが、医者はあくまでもジラーの死の原因が理解不可能であることに忠実であろうとする。

自殺したあの水曜日、いわゆる意識障害の兆候なんて一切見せていなかったことは、みんなが知っている。けれどジラーのそういう意識障害については、何ヶ月もの間、話題に上ったものだ。ジラーの話になると、誰もが意識障害という言葉を開口にしていたのだ。俺は運送業者に言う。奴ら、みんなして意識障害という単語を言っていた。大体意識障害という単語はとんでもないナンセンスだ、と俺は言う。それ以上何も分からなくて、知恵を絞っても何一つ出てこない時に、奴らは意識障害について語るんだ、お分かりですか、尊敬する方よ、教養のある人士であっても、理性と悟性と感情が働かない時には、誰もがいわゆる意識障害を引き合いに出すのだ。(W12, S. 112. 強調は原文ママ)

結局、何が原因で自殺したのか、ということを誰一人として理解出来ない。したがって、本作においてはジラーの自殺にまつわる因果関係が、言葉によっては把握出来ないものとされていることが分かる。こうした自殺の動機の分からなさは、死者のパーソナリティそれ自体の分からなさまで波及していく。ジラーの死は、医者に自分がジラーという人間を全く理解していなかった可能性を突きつける。医者の独我論的な世界の背後には、死者という、もの言わぬ

他者の存在があるのである。

教師の人生について知っているほどには、ジラーの人生については知らない、と俺は運送業者に言う。この人間のことは骨の髄まで知っていると思製紙工〔引用者：ジラー〕の人生について思ってきた、と俺は言う。今になって思い知ったように、実際は、製紙工は他の誰よりもよく分からない奴だ。教師の人生について知っているほどには、ジラーの人生については知らなかった。製紙工のことは骨の髄まで知っていると思うことが出来た、それどころかいつも機械的に、そう思って済ませてきたお陰で、俺は製紙工についてまじめに考えることがないままきってしまったんだ。(W12, S. 99f. 強調は原文ママ)

死者を言葉によって理解することは出来ない。単にジラーが自殺の理由を明かさずに命を絶ったから、というだけではない。生き残ったものたちが死者について語る言葉もまた、空虚なものとならざるを得ないからである。ジラーの突然の自殺という原因不明の事件が、饒舌な語りからなる本作の空虚な中心をなしている。この点は、ジラーの遺体の発見譚が、全体を三分割したちょうど中心に位置していることからも見取ることが出来る。¹³ 人々の憶測がジラーの自殺の原因を掴み損ねるさまを描くことによって、「行商人」の章は生き残ったものたちと死者との距離を描き出しているのである。

2. 2. 言語化を拒むものとしての自己

前節では、自殺者の動機が言語化を拒むものとして書かれていることを考察した。本節では、自己自身が言語によっては把握出来ないものとして本作では書かれていることを論じる。「はじめに」の冒頭で触れたように、本作が自己言及の不可能性を書いた作品であることは既に Thiher が指摘している。Thiher が重視するのは、クレタ人のパラドクスを思わせる医者 of 次の発言である。¹⁴

言葉は口に出すとすべて嘘になる、そのことは本当だ。尊敬する方よ、フレーズは私たちの生涯の牢獄なのだ。(W12, S. 88)

言葉がすべて嘘だとするならば、そう述べる発言それ自体の真偽はいかに判定すればよいのだろうか。Thiher によれば、こうして起こる無限退行が、本作の自己否定的な語りの特徴とな

¹³ 本作は全集版にして 67 頁を占める。97 頁から、115 頁までの 19 頁が、「行商人」の章に割かれている。「行商人」の章の前が 23 頁、後に続く部分が 25 頁である。

¹⁴ Thiher, S. 346.

っている。永遠に続くかに思われる本作の語りにおいて、自己とはただ沈黙のうちに表現されると氏は述べている。¹⁵

Thiher の論は、現代文学の動向を幅広く俯瞰するものであり、内容面に立ち入った具体的な検討はほとんど行っていない。そのため、本作における自己記述の不可能性が、行動の動機付けという因果関係を語る言葉において顕著に表れていることを見落としている。運送業者は繰り返し医者进行を誘い、何故カルタには行かないのかと尋ねるのだが、医者は場当たりのない言い訳を繰り返し、結局自分の行動の理由を説得的に示すことが出来ないのである。

場当たりのというのは、医者の述べる理由がコロコロと変わるからである。医者のカルタに行かない理由説明は次の五つである。①温泉で体調を崩したから (W12, S. 83f)。②カルタに行かない理由を述べるのは不可能 (W12, S. 91)。③カルタをしても無益だから (W12, S. 102)。④様々な理由があり、説明するのは不可能 (W12, S. 116)。⑤ストックが雪道で立てる音に耐えられないから (W12, S. 138)。医者は運送業者にカルタに行かない理由を尋ねられるたびに、何らかの理由を挙げて自己正当化を試みるが、決して成功することはない。次に尋ねられる時には、また新たな説明がなされ、医者のかつての理由説明を覆してしまうのである。結果的に分かるのは、医者には自らの行動を因果関係によって把握することが出来ないということである。医者の言葉が医者を裏切るという、第1章で確認したのと同様の構造をここにも見て取ることが出来る。

何故医者はカルタに行かないのだろうか。少なくとも、友人の死後カルタを止めたという医者の状況を考えるならば、死のショックがカルタを止める原因になったと考えるのが自然である。しかし、医者は不自然と思えるほどに、ジラーの死がカルタに行かないことの理由ではないと口にする。

カルタには行かない、製紙工ジラーが首を吊ったからではない、カルタにはもう行かないからだ。(W12, S. 82)

カルタにはもう行けない。自殺した奴のせいじゃない。(W12, S. 84)

一方で、医者はジラーの死を惜しむかのような言葉も口にしており、格別冷酷な人間として書かれている訳ではない。

ジラーのような人間、と俺は運送業者に言うのだが、この手の自分の殻にすっぽりと引き

¹⁵ Thiher, S. 347.

籠もった人間がカルタには必要なんだ、不可欠なんだ。(W12, S. 91)

何年にもわたる長い観察の果てに、突如として、俺たちは一人の人間の輪郭を理解する、そしてまさしくこいつと親しくなれたと思った瞬間に、こいつ（ジラー）は逝ってしまうのだ。(W12, S. 127. 括弧は原文ママ)

以上の記述から判断する限り、医者がカルタに行かないのは、ジラーの死のショックが原因であると解釈するのが妥当である。しかし、医者はそのことを自覚出来ない。ジラーの死というショッキングな出来事に対処する術を持たないために、医者は自らの行動を、因果関係によって把握し、説明する事が出来ないのである。結果テキスト上では、相互に矛盾した理由説明が乱立し、医者の心理を統一的には把握し得ないものになっている。しきりに理由説明を求める運送業者に対して、医者は次のように述べている。

俺同様、君にだって原因と結果は分かっているだろう、でも君はしつこく理由説明を要求する、と俺は言う。そんなこと出来やしないよ。(W12, S. 91)

こうした自己を因果関係によって記述することの不可能性は、何も医者の行動の動機にのみ及ぶものではない。本作の記述は無数のアフォリズムの集積とでもいった観を呈しているが、それら相互のアフォリズム間のつながりは一種の連想によってなされており、因果関係によるものではない。例を挙げるならば、次の引用において、「生」や呼吸のむなしさを表明する言葉は唐突に登場する。「カルタ」という医者にとって無益なものが、呼吸という、同様にそれ自体としては些末な事象を呼び込む。そして呼吸が「生」のモチーフと結びつく。これらの展開は恣意的な連想からなっており、そこに客観的な因果関係は介在していない。

俺は運送業者に言う。またいきなりカルタに行くことが出来るようになったとしても、カルタには行かないだろうと。カルタをしても何もならないと、今や分かってしまったから。何年にもわたって、カルタをしても何もならない、それどころかむなししい結果にしかならないという証拠を手にしたのだ。望めばカルタに行くことも出来る、と俺は言う。しかしむなししい結果にしかならないとやがて気付くだろう。それはちょうどこんなことをしても仕方がないと分かっているながらも、息を吸い込むことが出来るのと一緒だ。生きる、そしてこんなことをしていても何にもならないと悟る。どれほど長くカルタをしようが、長生きしようが、大差はない。(W12, S. 102)

ここにおいて、医者の手紙が、因果関係ではなく連想によって展開していくさまを見て取ることが出来る。上記の引用では「カルタ」に当たるこうした連想の媒介となる単語のことを、Ervedosa は「モナド」に喩えている。

思考は因果律によって組織されていない。そうではなく、思考が発展していくにつれ、単語、モチーフ、テーマが広がっていくのである。「繰り返され」ることで円を描き、「編み込まれ」ていく。そして、別のモチーフが連想によって引き合いに出され、同様の処理がなされる、といった経過が続いていく。これらの「編み込まれ」た言葉は、内的な統一を示す限りにおいて、一種の「モナド」として機能している。¹⁶

こうした連想を媒介とした語りによっているがために、本作は複数の時系列が様々に入り乱れたものとなっている。単に自己の動機の記述のみならず、本作の記述全般にわたって因果関係の欠如という特性が一貫しているのである。そのため、本作の記述から客観的な事実関係を汲み取ることは大変難しくなっている。

そもそも本作は、法学者にして数学者ウントによる依頼に応じて書かれている。ウントは「貴殿がこの手紙を手にする前日に、何時間にもわたって持続してお感じになったことについて」（W12, S. 76）書き送るように、医者に頼むのである。

しかし私たちの手元に残されたテキストは、既に見てきたように複数の時系列に及び、ウントの依頼とは似ても似つかない恣意的で独善的なものになっている。したがって、形式的な次元において、既に自己を記述することの不可能性が示されているとも解釈出来るだろう。そもそもウントの名前は冒頭の2頁を最後に、鳴りを潜める。¹⁷ その結果、作品の終わりまで繰り返し登場する「尊敬する方よ」という呼びかけや、Sieを用いた語りかけは匿名性を帯び、あたかも読者に直接語りかけているかのような効果を獲得することになる。しかし手紙の内容は因果関係を欠くために、書き手がいかなる人物なのか、という肝心の点は読み手に対して最後まで不分明なままである。因果関係の欠如が、自己の行動を動機づけることの失敗にはじまり、連想による物語展開のあり方や、「手紙」といった作品全体を貫く形式的な特徴にまで影響を及ぼしているのである。

こうした読み手と書き手の非対称性に関連して注目に値するのは、「ある遺稿」という副題である。作品末尾の自殺を仄めかす医者の言葉に見られるように、書き手の医者は物故者として設定されている。¹⁸ ジラーの自殺の原因を人々が理解することが出来ないのと同様に、ここに

¹⁶ Ervedosa, S. 335.

¹⁷ 次の箇所がウントの名前が言及される最後の箇所である。W12, S. 76, Z. 26.

¹⁸ 「俺みたいな人間は、いかさまみれの人間なんだ、そして頭を打ち砕いて、いかさまを打ち砕い

においても生者と死者との断絶が強調されているのである。

まとめ

以上、本作の言語懷疑を概観してきた。総じて言えるのは、本作における言語懷疑とは、人間の行動を因果関係によって把握することへの懷疑であるということである。ジラーの自殺の動機が分からないということに加えて、医者がカルタに行かなくなったことの理由も確たる形では触れられない。それどころか、医者語りそれ自体も、因果関係ではなく連想によって進展するという形をとっている。そのため、ジラーは何故死んだのか、医者は何故カルタに行かなくなったのか、といった情報が客観的で信頼に足る形では提示されないのである。本作の記述には、過去を語るための時間的な奥行きが欠如しているのである。

そして、本作において言語によって把握しがたい存在とされているジラー、そして手紙の書き手である医者両者が、ともに死者として設定されていることは象徴的である。因果関係が欠如しているがために、死者の内実を言語化することが出来ないのである。したがって、死者を語る言葉が挫折するありさまを書いた作品として本作を捉えることが可能だろう。それはまた、言葉によって死者を取り戻すことは出来ないということでもある。本作における言語懷疑とは、言語の無能力を示すことによって、死を前にした人間の無力さを示す技法なのである。

Sprachskepsis in Thomas Bernhards *Watten. Ein Nachlaß*

IIJIMA Yutaro

Dieser Aufsatz behandelt die Erzählung *Watten. Ein Nachlaß* (1969) von Thomas Bernhard. „Watten“ ist der Name eines in Österreich beliebten Kartenspiels. Bernhard ist bekannt dafür, dass er sein Leben lang über den Tod schrieb. Dieses Werk behandelt den Tod eines Freundes.

Der Ich-Erzähler, ein Arzt, wohnt in einer Baracke. Er ist arbeitslos und widmet sich seinen medizinischen Studien. Seit 20 Jahren geht er gewöhnlich jeden Mittwoch zum Watten-Spiel, bis eines Tages einer seiner Mitspieler, der Papierarbeiter Siller, Selbstmord begeht. Daraufhin gibt der Erzähler das Kartenspielen auf.

Die Erzählung ist in Form eines Briefes verfasst, den der Arzt an einen Juristen schreibt. In diesem Brief versucht er die Ereignisse um den Tod Sillers mitzuteilen, wobei auch manches aus seinem eigenen Leben einfließt. Besondere Merkmale des Werks sind die unvermittelten Episoden-Wechsel und unsinnigen Wiederholungen, die den Leser verwirren.

Viele Forscher haben Bernhard eine nihilistische Haltung hingewiesen. Hermann Helms-Derfert zum Beispiel liest die Erzählung als ein Resultat der Sprachskepsis Bernhards. In diesen Interpretationen tritt aber das Todes-Motiv meist eher in den Hintergrund. Ich interpretiere die Erzählung mit Blick auf die Sprachskepsis und versuche so zu verdeutlichen, dass es die Erinnerung an den Tod zum Thema hat.

Wie schon Helms-Derfert konstatierte, will der Arzt alles überdeutlich darstellen und kann gerade deshalb nichts Sinnvolles sagen, denn je überdeutlicher seine Rede wird, desto sinnloser erscheint sie. Zum Beispiel ersetzt er bestimmte Wörter nicht durch Pronomina. Ich interpretiere das als Sprachkritik. Die gleiche Tendenz zeigt sich in seiner Wiedergabe von Unterhaltungen. Er gibt die Aussagen des Fuhrmanns so exakt im Konjunktiv und mit zwischengeschaltetem „er sagt“ wieder, dass sie rein subjektiv anmuten. Diese Schreibweise reflektiert Bernhards Perspektivismus.

Diese Schreibweise ist im Kapitel „Der Reisende“ am ausgeprägtesten. Vieles, was der Reisende, der Siller erhängt im Wald fand, sagt, wirkt rätselhaft oder widersprüchlich. Zum Beispiel gibt er vor, ein Licht gesehen zu haben, das von niemand anderem bemerkt wurde.

Da der Reisende als unheimlich bezeichnet wird, können seine Aussagen aber keine Authentizität beanspruchen. Die Überdeutlichkeit, mit der der Bericht des Reisenden wiedergegeben wird, lässt keinen Zweifel daran, dass hier eine wirkliche Kommunikation nicht stattfindet.

Die Unfähigkeit des Arztes, mit anderen in Kommunikation zu treten, wird besonders hinsichtlich des Todes Sillers deutlich. Die Leute sagen, dass Siller wegen einer Sinnesverwirrung Selbstmord begangen habe, doch der Arzt findet dies falsch. Er glaubt, die Gründe für Sillers Tat könne niemand erklären, da für ihn Sillers Persönlichkeit und sein Verhalten unverständlich sind. Das symbolisiert die Unmöglichkeit, durch Sprache die Wahrheit mitzuteilen und mittels ihrer mit anderen zu kommunizieren. Die Sprachskepsis in diesem Werk bezieht sich also auf den Tod.

Sillers Tod macht den Arzt so traurig, dass er nicht mehr zum Watten-Spiel gehen kann. Der Fuhrmann kommt zu seiner Baracke, um ihn wieder einzuladen. Der Arzt dagegen bringt immer neue Gründe für seine Absenz vor und verleugnet jeglichen Zusammenhang zwischen dem Selbstmord und seiner Abneigung gegen das Watten, was sehr kurios ist. Ich denke, dass er Probleme hat, seine eigene Trauer zu akzeptieren. Da er jedoch nicht in der Lage ist, seine Gefühle in Sprache zu kleiden, kann er den Fuhrmann nicht überzeugen. Hier findet sich also wieder Sprachskepsis.

Die Trauer des Arztes gilt dem Tod Sillers. In ihr kommt aber auch die Unmöglichkeit zum Ausdruck, das Innere eines Menschen zu beschreiben. Die Trauer angesichts des Todes eines Menschen ist etwas Unsagbares. Diese Sprachskepsis verweist auf die menschliche Ohnmacht gegenüber dem Tod.